

## 「夢や希望をもつということとは」

子どもの権利調査員 谷山 正司

(在籍期間：H29.4～ )

私は、今でも「3」という数字にいろいろなこだわりを持っています。下駄箱やロッカーなどの番号、何かを選ぶときは3番目とか3回目です。この「3」という数字は、私が野球に興味を持った時の直接の要因であったミスタープロ野球・長嶋茂雄終身名誉監督が現役のときにつけていた背番号3からきています。小学校時代・中学校時代の私には、長嶋選手の一挙手一投足が輝いており、憧れていました。自分が野球をやるようになり、長嶋選手と同じポジションのサードを守り、仲間と白球を追いかけていた原点が長嶋選手でした。今思うと少し気恥ずかしいのですが、「将来はプロ野球選手になる」という夢をもって、毎日の生活が野球中心で回っていたことが懐かしく思い出されます。

内閣府が平成25年に行った「小学校・中学校の意識に関する調査」(有効回答数：1,404人)の将来就きたい職業についての調査結果を見ました。この調査では、将来就きたい職業で最も多かったのが、スポーツ選手(14.0%)、次に幼稚園・保育園の先生(6.4%)、看護師・介護福祉士(5.0%)、医師・歯科医・薬剤師(4.9%)と続いていました。また、「わからない」と回答した割合が、スポーツ選手より高い「16.7%」という数値もありました。単純にこの割合から、小・中学生の全体像を類推しますと、小・中学生の6人に1人は将来の職業がわからないということになるのではと思います、少し愕然としました。なりたい職業と将来の夢と希望は直結しているわけではありませんが、私にとって気になる結果でした。私は、子どもたちが将来に夢や希望を持つということは、自分の未来に向けて、自分の将来を切り開いていく大きな原動力になるという面でとても大切なことだと思っています。

「大きくなったらスポーツ選手になる」、「日本一のお菓子屋さんになる」、「人を助ける人になる」など、子どもたちは、自分の将来の職業や自分の姿を大きな白いキャンパスに色鮮やかに描いていきます。そのときに、夢や希望を描く子どもの思いに寄り添うために、私たち大人は、そのことに気づいてあげられるアンテナを常に子どもたちに向けていたいものです。夢や希望を実現することの難しさや厳しさを知っているのは大人です。そういう意味からも、子どもたちの夢や希望に気づいたときに大切にしたいことがあります。それは、子どもたちが夢や希望を追う過程で、真の自分に気づき、自分のもっている資質や特性を伸ばすことができる環境づくりに、少しでもかかわってほしいということです。子どもたちには、独自の世界を切り開いていく道筋そのものが大切な価値ある生き方につながるということ、自分の成長という過程で、たくさんの経験や体験をしてほしいと思います。

余談になりますが、「一番の選手になりたい」という大きな夢を追いかけて、大谷翔平選手がメジャーリーグに挑戦しました。日本で見られなくなるという残念な気持ちもありますが、それ以上に1人の若者の夢を応援したいと強く思います。是非、世界一の選手になって、夢を達成してほしいと思っているのは私ばかりではないと思うのですが。

## 「最高のご褒美Ⅲ」

子どもの権利相談員 佐藤 加代子

(在籍期間：H27.4～H30.3)

2017年6月25日(日曜日)午前5時00分、「第32回サロマ湖100kmウルトラマラソン」の号砲が鳴りました。8年前に真新しいランニングシューズを履き、軽くジョギングから始めた私が、このスタート地点に立っていることは想像もつかなかったことです。

フルマラソンの完走回数を重ねるたびに、その醍醐味を覚え、いつしかランナーの憧れである「ウルトラマラソン」への挑戦をしてみたくなったのは、ランナー故の性なのかもしれません。

いざ、エントリーを決めたからには、なんとか完走したい。ならば、それなりの走力が必要で、ウルトラマラソン経験者からトレーニング方法を学び、行い、耐えてきました。これまで以上の距離を踏み、レース運びを頭に入れ、モチベーションをあげて現地に入った訳です。ところが当日を迎えた朝は、土砂降りの洗礼。ただでさえ不安感で押しつぶされそうなのに、冷たい雨と風に苛まれる過酷なスタートとなりました。

話には聞けども、さすがに100kmの距離は想像以上に果てしなく、気の遠くなる長さです。しかも、12時間以上風雨に打たれながら走り続ける・・・80kmを過ぎた辺りからは、手先や足の感覚が薄れ、補食やスポーツドリンクさえも受け付けなくなってきました。なぜ、こんな辛い思いをしてまで走っているのか？と自問・・・さすがに「もうダメ、リタイアしたい」と何度も迷い、諦める気持ちが沸いていました。しかし、そのたびに沿道に立つボランティアの皆さん、地元の方々、更には遠方から駆けつけてくれた仲間から、「頑張れ」「ファイト」「ナイスラン」等々、声をからしての大声援に、折れそうな心を何度も支えてもらいました。その途方もない距離も、やがてはゴールの道筋が見えてきます。ゴールゲートを見た瞬間には、こみ上げる嬉し涙が流れ落ち、待ちうける仲間からの祝福や歓声、そしてなんと表現したら良いのかわからない不思議な達成感と充実感を味わえる「最高のご褒美」をいただきました。そして、それは多くの皆さんの「支え」があってこそ・・・と、ひとしきり感慨深く思うのでした。

完走できたその日の夜は、興奮していたのか中々寝付けなく、ぼんやりとレースを思い出しつつ、自分が担う相談業務について考えていました。

人生の歩みはマラソンとよく似ていて、困難なこともたくさんあります。子どもたちが問題を抱え、大きな壁にぶつかった時、勇気を出してかけてきた1本の相談電話に、今までどれだけ、その「支え」になれることができただろうか・・・。もう一度振り返り、私がレースで多くの人に支えてもらった感謝の気持ちを込め、子どもアシストセンターを頼ってきた子どもたちや保護者の方々に「励まし」や「安心感」を感じるような言葉を返してあげよう・・・。そう考えながら、うとうと眠りについた翌朝は、全身に響く筋肉痛の“おまけ”がついていました。

# 相談員のコラム

## 「心の休憩」

子どもの権利相談員 富田 かなえ

(在籍期間：H27.4～H30.3)

打てない時期こそ、  
勇気をもってなるべくバットから離れるべきです。  
勇気をもってバットから離れないと、  
もっと怖くなることがあります。  
そういう時期にどうやって気分転換をするかは、  
すごく大事なことです。

イチロー

私が大切にしている言葉です。

くじけるのが得意な自分をはっきりと意識したのは、中学1年生のときでした。

その夏、父の転勤で転校することになりました。それまでの充実した学校生活や仲の良かった友人からいきなり引き離され、遠い北海道へとやってきた私の気持ちはどん底でした。新しい学校では、不安の中。女子は皆グループが出来上がっており、何とか仲間に入りたいと作り笑顔で周りの様子ばかりうかがっていました。学習内容も違い、頑張ろうと入った委員会も部活も馴染めず、まさに八方ふさがりで、苦しくて仕方ありませんでした。

ある朝思いました。「学校を休みたい。」もう限界だという気持ちと頑張っに行かなくてはダメじゃないかという気持ちで揺れ動きました。が、元来自分に甘い人間ですから、「何とかして休みたい」と考えたのです。そこで、「風邪をひいたみたい」と言って体温計を手にし、母が見ていない隙に熱い飲み物のカップにつけたのです。そうやって、2日続けて休んだのですが、さすがに母も見抜いたのでしょうか、3日目は「もう大丈夫」と送り出されました。学校への道すがら「休んでも状況は何も変わっていない。けど、まあ何とかやってみるか。一生続くわけでもないし・・・」と切り替えることができたことを覚えています。その出来事から、自分がくじけそうになったときは、「少し離れる」ということを心がけるようになりました。

子どもたちは、疲れていないでしょうか。

電話をくれたあの子も、メールを送ってくれたこの子も、みんな毎日頑張っている。本当に、子どもたちは、学校や家庭の中で何とか精一杯やっているのです。子どもたちの苦しい胸の内を聴き、悩みを書いてくれた文面を読むと、まずは「少し自分の時間を持ち、深呼吸してみよう」と伝えたいくなります。ときどきは肩の力を抜いて、ゆっくりと心を整理できる時間や環境が子どもたちには必要です。

「夕ぐれ時はよい時。かぎりなくやさしいひと時」（作：堀口大学）

一日を終えた夕ぐれ時の美しさ、やさしさを感じるができるように、自分と向き合う時間を大切にしたいと願っています。

# 相談員のコラム

## 「絶体絶命のピンチ」

子どもの権利相談員 青木 雪枝

(在籍期間：H28.4～ )

スポーツは得意とは言えませんが、嫌いではなく、特にテニスは、中学・高校と部活動を行っていたこともあり、まあそこそこ打つことが出来ます。（「出来ました」の方が正しいかも）

以前の職場では、毎年テニスの試合があり、団体戦で勝ち抜くと全市大会へと進めます。

3ペアが試合を行い、2勝したチームが勝ち上がります。私は、その1ペアとして試合に参加させていただきました。一試合5ゲームマッチで、先に3ゲーム取った方が勝者となります。我がチームは順調に勝ち進み、全市大会まであと1勝となった試合でした。

1ペア目は惜しくも敗れてしまい、私は2ペア目として出場。この試合に負けると全市大会へは進めません。しかも相手チームは、昨年全市大会に駒を進めている強豪チームです。

さすがに打っても打っても球は戻ってきます。中々自分のペースでテニスが出来ないまま遂に相手チームのマッチポイント。あと1本取られると負けてしまいます。

まさに絶体絶命のピンチです。

相手チームの応援席は、すでに全市大会の切符をつかんだかのごとく「あと1本！あと1本！」のコールで沸き立っていました。「あと1本！あと1本！・・・」応援コールはさらに大きく響いてきて、私の頭は真っ白でした。とにかく夢中で球を追いかけては返し、追いかけては返す。そして相手の打った球が私のいる反対サイドぎりぎりに落ち、誰もが「決まった！！」と思った瞬間、私の足はぎりぎりボールに追いつき、相手コートの死角に入って決まった。

ワーッとという歓声でフッと我に返りました。何か摩訶不思議な力が降りてきたような感覚でした。

そこからピンチはチャンスに変わり、試合の流れは一気にこちらに傾き、絶体絶命のピンチから試合をひっくり返して勝利しました。3ペア目は、我がチームのエースペア。もちろん勝利！！やったー！！遂に全市大会進出。全市大会では、またもやミラクルな勝利もあり、決勝まで進み、そこでは負けたものの準優勝。まさに快挙でした。

この貴重な経験は私に、「何ごとも最後まで諦めてはいけない。人はもう無理と追い込まれたときにこそ自分の持っている力以上の力を引き出すことが出来る。ピンチは、人を成長させてくれる。」と実感させてくれました。

子どもアシストセンターに毎日届く子どもたちのピンチ。辛さ、苦しさ、困難な状況・・・。

最後まで諦めないで頑張り、逆境をチャンスに変えて成長していけるよう、子どもの気持ちに寄り添い、次のステップを踏めるよう支援していける相談活動を目指していかなければとさらに思う今日この頃です。